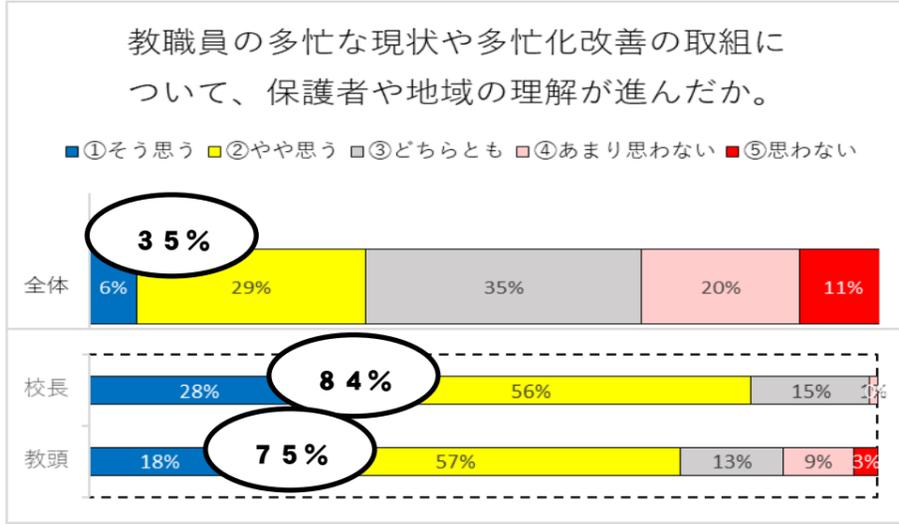


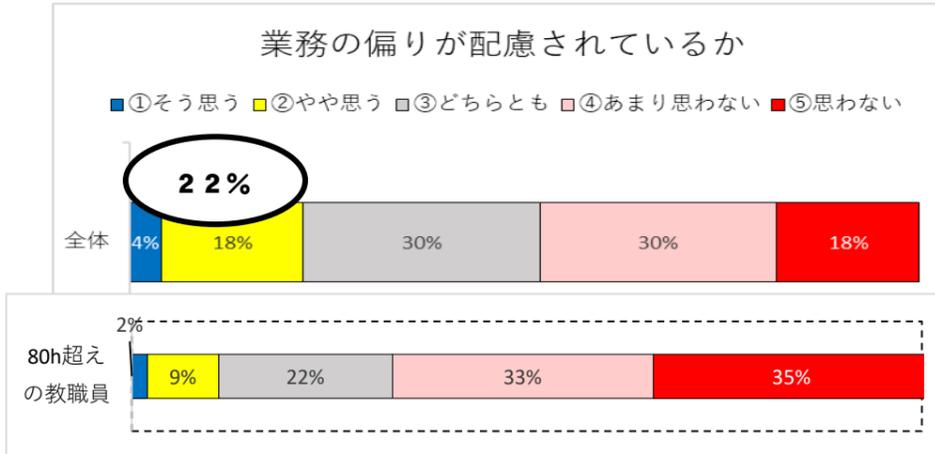
⑤ 教職員の多忙化改善に向けた取組への「保護者・地域の理解」は3割以上の教職員が、進んだと感じている。



○教職員の勤務時間の現状や多忙化改善に向けた取組について、保護者や地域の方々に理解と協力を求めてきた。特に、連携の窓口となる管理職は3年間の取組を通じて理解が進んだと実感している。

- ・PTA活動を教師主導から、PTA主導にすることで、教職員の負担・時間軽減になった。(50代・女性・特別支援学校校長)
- ・市町教委が教員の多忙化を削減する取組を保護者へ配付していただいたお陰で、PTAや地域の方々の教員に対する時間外勤務の意識が大きく変わったと思う。(50代・女性・中学校校長)
- ・PTA実行委員会のオンライン化などが、主に教頭の縮減につながった。(50代・男性・小学校校長)

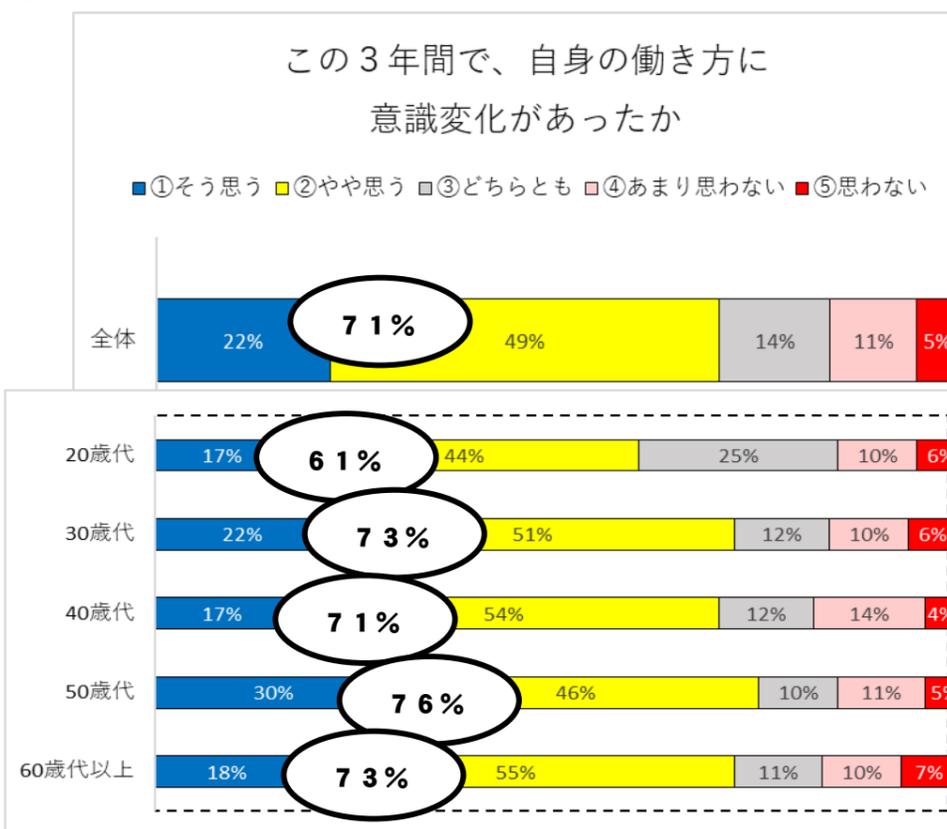
⑥ 業務の平準化が配慮されていると感じている教職員は、全体の約2割にとどまっている。



○業務の平準化においては、進んでいないと感じている教職員が多く、時間外勤務時間が長い教職員ほど、平準化へ配慮がなされていないと強く感じている。

- ・業務の平準化を進めてほしい。特定の人に業務が偏りすぎ。(50代・女性・特別支援学校教諭)
- ・それぞれの業務において、工夫や効率化、チームで行うことなど、一人ひとりが多忙化改善について知恵を出し合い、それを共有することが必要だと思う。仕事を平準化することではないと思う。(50代・男性・特別支援学校部主事)

⑦ この3年間の取組の中で、7割以上の教職員が働き方について意識の変化があったと感じている。



○30歳代以上はどの年代においても、7割以上の教職員が意識変化があったと感じており、20歳代でも6割以上が変化があったと感じている。

○変化があったと答えた教職員の中で、変化の内容として多かった項目は、業務に見通しを持つ・業務の精選・終わりの時間を決めて取り組むなどであった。

- ・これまで当たり前のように思っていた100時間を超える時間外勤務や行事の準備に違和感を覚え、自分の人生について考えるようになった。(30代・男性・中学校教諭)
- ・業務の精選について提案できるようになった。(20代・男性・高校教諭)
- ・家庭での時間を大事にし、家には仕事をもち帰らないよう意識している。どうしてもできない場合はなるべく残るか、早朝出勤する。(40代・女性・高校教諭)
- ・自分の体調管理により多くの注意を払うようになった。(60代以上・男性・高校教諭)

(補足) それは、どのような意識変化ですか。(変化があった人のみ回答。複数回答可)

